

中日両語における様相類疊語

孫 琦

1. はじめに

中国語には同一漢字が重疊する、いわゆる重ね型の表現がある。形容詞の特徴として、一音節形容詞が単独では自由に修飾語になりやすく、重ね型にすることが多い。例えば、次の例にあげたA A型・A B B型・A A B B型などがある。特に、様態を表す形容語(形容詞/副詞)の重ね型(「様相類疊語」と呼ぶ)が中国語には非常に多く存在する。これらは形容詞の周辺に位置するものだが、日中同形語の一種として興味ある存在である。本稿では、日中のこのような様相類疊語の対照を行い、その数や種類を調査して、中国語から借用したと考えられるものとそうでないものの違いについて考えたい。

(中国語)	悠悠	淡淡	堂堂	漫漫	战战兢兢	赤裸裸
(日本語)	悠悠	淡淡	堂堂	漫漫	戰戰兢兢	赤裸裸

2. 中国語と日本語の疊語

日本語の「疊語」は、「複合語のうち、同じ語を重ねて一語としたもの。」と定義され(『国語学研究辞典』p.109)、和語のものと漢語のものがある。品詞からみると、名詞・動詞・形容詞・副詞や感動詞など多品詞にわたっている。

一方、中国語の疊語について、朱德熙1982では「词的构造」の中の「重疊式」として、例えば、名詞の「妈妈」・動詞の「想想」・形容詞の「大大」「干干净净」・副詞の「常常」などの例が挙げられている。日本語同様多品詞にわたって存在するが、特に形容詞や副詞の場合、活用形の一種として重ね型にするのが一般的とされる。また、周荐2002では『現代漢語辞典』の見出し語における現代中国語の疊語(疊字詞)の種類を調査した結果、二音節疊語は352語で、中国語疊語のおよそ46.5%を占めていると報告している。

3. 考察対象

『分類語彙表』増補版(約8万7千語)の「相の類」から次の基準に基づいて、音読み漢語疊語を選出した。さらに、熊谷1973に掲載されている漢語疊語から、そして明治・昭和時代の小説から語を集めた。なお、中国語と日本語を区別するために、日本語の疊語には「々」を使う。

選出の基準：

① 漢字表記され、同語基が反復するものを対象とする。

例：往々、刻々、徐々、遅々、悠々…

したがって、「しくしく、にこにこ、のろのろ」などの和語疊語は除外する。

② 訓読みと音読みの両方が存在する語を対象に入れる。

例：早々(はやばや/そうそう)、深々(ふかぶか/しんしん)……

したがって、「静々、前々、久々」など訓読みだけの語は除外する。

以上のようにして収集した日本語の様相類疊語は255語である。この255語を考察対象として、『漢語大詞典』(以下『漢詞』)、『日本国語大辞典』(以下『日国』)、『漢語大詞典』(以下『大漢和』)によってこれらの語の採録の有無と記述のしかたを調べる。

4. 数及び種類

4.1 日本語

AA型：210語(82.4%)

例：暗々、延々、往々、赫々、刻々、煌々、遅々、烈々、錚々…

AABB型：23語(9.0%)

例：奇々怪々、喧々囂々、時々刻々、正々堂々、戦々兢々…

ABB型：2語(0.8%)

例：赤裸々、白皚々

AAB型：3語(1.2%)

例：暗々裏、欣々然、万々歳

〇〇AA型：15語(5.9%)

例：気骨稜々、和気藹々、余裕綽々、興味津々、威風堂々…

AA〇〇型：2語(0.8%)

例：悠々自適、種々雑多

4.2 中国語

4.2.1 『漢語大詞典』による調査

日本語の漢語疊語255語のうち、約8割以上を占めているAA型の二字漢語疊語210語について、『漢語大詞典』をもとに中国語の出典があるかどうか調べた。

I 『漢詞』に見出し語がある語：191語

→ 中国語から日本語への借用語の可能性が高い

闊々	快々	涓々	爍々	切々	段々	堂々	便々	叻々	浪々
暗々	皚々	娟々	孜々	姍々	团々	喃々	步々	陽々	碌々
哀々	峨々	喧々	綽々	漸々	遲々	日々	蓬々	揚々	韃々
曖々	赫々	拳々	種々	楚々	着々	年々	芒々	洋々	潛々
靄々	戛々	眷々	重々	早々	丁々	能々	茫々	様々	漠々
易々	呵々	慳々	肅々	匆々	嫻々	非々	勃々	磊々	清々
唯々	嬉々	蹇々	順々	葱々	沈々	霏々	每々	爛々	閑々
郁々	巍々	乾々	諄々	淙々	亨々	微々	漫々	粒々	噴々
一々	汲々	鷲々	猩々	蒼々	喋々	媿々	密々	寥々	冥々
殷々	急々	皓々	蕭々	錚々	滴々	渺々	脈々	稜々	寂々
陰々	恐々	浩々	上々	踰々	点々	頻々	面々	凜々	皎々
鬱々	兢々	煌々	所々	騷々	軋々	沸々	綿々	縷々	
宮々	空々	轟々	徐々	総々	得々	芬々	濛々	壘々	
炎々	匂々	個々	深々	息々	毒々	紛々	朦々	麗々	
延々	区々	昏々	津々	統々	訥々	霽々	默々	玲々	
奄々	炯々	滾々	森々	代々	等々	平々	悶々	冷々	
焰々	甍々	懇々	駸々	諾々	滔々	別々	夭々	歷々	
往々	下々	再々	少々	多々	濤々	颯々	妖々	烈々	
快々	件々	些々	清々	淡々	蕩々	飄々	悠々	恋々	
恢々	妍々	颯々	精々	坦々	整々	翻々	杳々	朗々	

II 『漢詞』に見出し語がない語：19語

→ 日本語の中で造語された可能性が高い

怪々 渴々 奇々 軽々 刻々 散々 瑞々 是々 嫡々 内々
片々 方々 凡々 満々 妙々 銘々 楽々 隆々 唳々

このほか、「別々」と「精々」の2語について、『漢詞』では同じ語形が確認できるが（「別々」の見出し語は『大漢和辞典』にはない）、以下のように日本語と中国語の意味が著しく異なり、同一の語とは考えにくい。[]は筆者がつけた日本語訳。

別別(biè biè)：

① 谓改变。[変える]

(清)李渔《比目鱼·偕亡》「我的意思，还要尽心竭力，做几句好戏～众人的眼睛。」

② 象声词。[擬声語]

茅盾《烟云》「他刚看了开头的称呼，心就～地跳。」

精精(jīng jīng)

① 兽名。[獸名]

② 指精明的人。[細心で頭が切れる人を指す]

なお、『大漢和』の「精々」の項目では、「せいせい」と「せいぜい」二通りの読み方があり、「せいせい」の場合は『漢詞』とほぼ同じ意味を示しているのに対し、「せいぜい」と読む場合は、「㊠できるだけ。力の及ぶ限り。㊡十分に見積もるさま。最大限。」と、現代日本語では一般的に副詞として用いられる場合の意味となっている。

「別々」と「精々」の2語を加え、以上の21語について、さらに『大漢和辞典』及び『日国』で調べた。

4. 2. 2 『大漢和』及び『日国』による調査

『大漢和』及び『日国』で21語を調べた結果、「片々」「方々」「満々」「楽々」

「隆々」の5語に中国語文献の出典が示されていた。これらの語も中国語から日本語に借用した漢語疊語と見られそうである。ただし、「楽々」は、『大漢和』では、②の意味での中国語の出典が示されていない。

楽々(らくらく)

- ① 甚だたのしいさま。安楽なさま。《荀子》
- ② たやすいさま。易易。[狂言・薩摩守]

さらに、『日国』では「楽々」の二つの意味解釈のうちの②の「たやすく物事をするができるさまを表わす語。楽に。」の用例としては、現代作家の作品(『自然の子供』1968金井美恵子)のみ記載されている。したがって、『大漢和』の①の「安楽に」という意味での「楽々」は本来中国語の語義であるが、②の「たやすい」の語義は日本で生まれた新たな使い方であるといえよう。ちなみに、現代中国語の辞書である『現代漢語辞典』では「乐乐(楽楽)」の見出し語はない。

残りの16語の中国語の出典が見当たらないものについては、次のように分類を試みた。

- A 〈日本語の疊語A A B B型の一部(A A或いはB B)を独立させた語〉
怪々 奇々 刻々 是々 凡々 嫡々 (6語)
- B 〈語形は中国語にも存在するが、日本語では著しく意味が異なる語〉
別々 精々 (2語)
- C 〈中国語の別の疊語から変化した語〉
銘々 唳々 (2語)
- D 〈日本語の中で訓読みから音読みに変化した語〉
内々 軽々 瑞々 (3語)
- E 〈その他〉
渴々 散々 妙々 (3語)

Aの〈日本語の疊語A A B B型の一部(A A或いはB B)を独立させた語〉の6語に関しては、それぞれ中国語にも確認できる元のA A B B型四字漢語

疊語から一部を取って独立語として成立させたと考えられる。語義ももとの語の一部の意味とほぼ重なる。「奇怪」→「奇々怪々」→「怪々」「奇々」、「時刻」→「時々刻々」→「刻々」、「是非」→「是々非々」→「是々」、「平凡」→「平々凡々」→「凡々」、「嫡親」→「嫡々親々」→「嫡々」。これは日本語の中で行われた造語であるため、成立させたAAあるいはBBの語形は中国語にはない。日本語の漢語のうち、疊語としての特徴的な造語パターンであるといえる。しかし、このような造語パターンは、日本語だけのものではなく、中国語においても同様の造語パターンによって、造られた語は数多くあると考えられる。

Bの〈語形は中国語にも存在するが、日本語では著しく意味が異なる語〉の場合の「精々」と「別々」の2語についてはすでに4.2.1で述べている。

Cの〈中国語の疊語から変化した語〉の場合、「銘々」は『日国』では《「めんめん（面々）」の変化した語」と示されており、さらに「銘々」の語誌についてつぎのような説明がある。《(1)室町時代までは、メンメン（面々）がこの意味を担っていたが、室町後期にメイメイが出現し、次第に取って代わられた。(2)メンをメイというようになる変化は、「面目」がメイボク、「冷泉」をレイゼンと音読するのと同様。》

「唳々」について『日国』では、「りょうりょう」の見出し語表記は「唳唳」「嘹嘹」「嘹唳」の三通りが示されている。中国語の場合、『漢詞』の見出し語には「嘹嘹」「嘹亮」の二通りである。日本語の「唳唳」は中国語辞書にみられないが、日本語の「嘹」と「唳」は音読みが共通していることから、「唳々」は「嘹嘹」「嘹唳」の表記が変化したものか、新たな当て字である可能性があると考えられる。

Dの〈日本語の中で訓読みから音読みに変化した語〉の場合、「内々」については『日国』の〈補注〉では次のような記述がある。《中古では「うちうち」が一般であったが、のち字音で「ないない」というようになったと思われる。》なお、「内々」は中国語の辞書には採録されておらず、『日国』にも中国の出

典はない。

「軽々」は『日国』では、「かるがるしいさま。深く注意を払わないさま。副詞的に用いることも多い。」と解釈され、日本語の用例はすべて近代小説以降のものである（内地雑居未来之夢(1886)〈坪内逍遙〉、福翁百話(1897)〈福沢諭吉〉、東京の三十年(1917)田山花袋）。中国語の用例は中国の古い出典1例のみである（劉向-関尹子書録「使人冷冷輕輕不使人狂」）。一方、中国語の「輕輕」という語は一音節形容詞「轻」を重複させることによって、修飾語としての機能をもつようになる。例えば、「輕輕的脚步声」（小さい足音）「輕輕地敲」（軽く叩く）「輕輕地摆动」（軽く揺れ動く）など、現代語で一般的に使われている。しかし、日本語の「軽々」は中国語の修飾語としての語形「輕輕」であるとは考えがたく、日本語の和語「輕輕しい」から音訛化したものであると考えたほうがよさそうである。

「瑞々」については、中国語の辞書には見出し語がなく、『日国』では「瑞々（ずいずい）」の見出し語に、「まことにめでたいさま」という意味で、東京年中行事(1911)〈若月紫蘭〉からの出典のみである。もっとも「ずいずい」という読み方はあまり日本語では一般的ではないようである。それに対し、和語の「瑞々しい（みずみずしい）」が「瑞々（みずみず）」という語形に変化して使用される場合が見られる。例えば、

- (1) 庸三もこの人の踊りをずっと前から見ていた。十二三年も前に、日本橋倶楽部で初めてその人を見た時は、彼女も若かったが、踊りも瑞々していた。次第に彼女は新しい主題を取り扱い、自身の境地を拓いて行った。（『仮装人物』徳田秋声）
- (2) この山は人間が昵み易い山だった。水無川を越えて山腹にかけ山民の部落があった。石も多いがしかしそれに生え越して瑞々と茂った、赤松、縦、山毛櫸の林間を抜けて峯と峯との間の鞍部に出られた。そこはのびのびとしていて展望も利いた。（『富士』岡本かの子）

「瑞々しい」から「瑞々（みずみず）」という語形が成立した、というように考えられるが、しかし、それは「瑞々（ずいずい）」という漢語の意味とかけ

離れており、同一語であるとは考えがたい。この点についてはさらに追究する必要がある。

Eの〈その他〉に分類した3語は、それぞれ異なった造語背景があると推測される。「散々」の《ちりぢりになるさま。細かくばらばらになるさま。》の形容動詞タリ・ナリとしての用法は、中国語の「散散落落(散落)」「散散乱乱(散乱)」の「散散(一語として認められない)」の意味に通じると思われる。しかし一方、《物事の程度が激しいさまを表わす語。いろいろとひどく。はなはだしく。》の副詞としての現代日本語での一般的な用法においては、日本語の新たな使い方、中国語にはこのような用法はない。前述の「精々」の場合、連濁する読みである「せいぜい」の意味や用法は中国語にはなく、日本語の新たな意味・用法となる。同様に、「さんざん」と連濁する読み方も日本語らしいことを印象付ける。

「妙々」の『日国』での用例を見ると興味深いことに気づく。以下の二例は『日国』に記載されたものである。

- (3) 「こいつアよくできた、妙々、めう張のかがみだ」洒落本・廓節要(1799)
- (4) 「妙(メウ)々々々、万一彼奴等がそんな不届千万な事を仕出したらば(略)此(ぢぢい)老人でも喰殺してやるでござろう」交易問答(1869)
加藤弘之

この二例での「妙々」は、ある出来事について「見事だ!」「巧妙だ!」と賞賛する場合に用いられ、「妙々」と二回繰り返すのだけでなく、さらに「妙々々々」のように連発して使われている。こうした自由なくり返しが次第に疊語としての「妙々」の語形が落ち着いてきたと考えられる。中国語でも「妙妙」を一語としてではなく、やはり「妙! 妙! 妙! (見事だ! 巧妙だ!)」と連発して、むしろ感嘆詞のように使われることが多い。

「渴々」は〈のどがかわくさま〉という意味で使われ、中国語の「渴」と意味的には同じである。しかし、疊語の形で使われる例は中国語にはない。したがって、「渴々」に関しては、漢字一字の意味が強調されて日本で造語さ

れた可能性が高いと思われる。

4.2.3 その他での用例調査

国語辞典類以外に、『現代漢語重疊形容詞用法例釈』と『人民日報』'95-'00の全記事から、現代語として用例が見られる一時的な語形として、「怪怪、轻轻、刻刻、片片、方方、满满、隆隆」の7語について現代中国語としての用例が得られた。いずれも見出し語として『漢語大詞典』にはないが、実際の使用例として疊語語形が見られるものである。

- (5) 床边一个破碗里盛着一点咸菜,屋角堆着早该扔进垃圾箱的破罐烂盆,
怪怪的气味扑鼻而来。(人民日报1995.03.02)
- (6) 围绕山野菜,英山县还推出绿源泡菜、南瓜汤、毕府粉丝、毕府臭豆腐、豆腐渣等系列风味菜。满满的一桌菜,看上去清淡如水,吃起来胃口大开。(人民日报2000.06.05)
- (7) 真革命党不只是说的,乃是实行的,能刻刻不忘实作实践,日久天长,定能成为一个顶天立地、救世救民的大牺牲者、大革命党人。”(人民日报1998.09.01)
- (8) 大妈看了一眼,轻轻地叹了口气,走进院子。(巍巍《东方》)

(5)の「怪怪的气味」は「変な匂い」で、(6)の「满满的一桌菜」は「テーブル一杯の料理」の意味で、それぞれ形容詞「怪」「満」を重ねて連体修飾語となっている。(7)の「刻刻不忘」は「一刻も忘れない」で、(8)の「轻轻地叹了口气」は「軽く嘆いた」の意味を表し、(7)の「刻刻」は「时时刻刻」の「刻刻」で、(8)の「轻轻」は形容詞「轻」を重ねて連用修飾語として用いられている。「怪」「満」「轻」のような中国語の一音節形容詞は特に、文の成分として修飾語になる場合、疊語の形をとるのが一般的である。それはあくまで形容詞の用法(文法的形式)にすぎなくて、多くの場合疊語の語形が辞書の見出し語として掲載されない。これは中国語形容詞の大きな特徴といえよう。

5. まとめ

中日両語における様相類疊語について、まず日本語疊語の数及び種類を調査し、二字漢語疊語210語を対象に、それと対応する中国語の辞書における採録の有無を調べた。さらに、中国語にはないもので日本で造語されたと考えられる漢語疊語16語を、それぞれの造語パターンによって分類を試みた。中国語の疊語については、一音節形容詞が重ね型になってはじめて修飾語としての機能を果たして、例えば「怪怪」「满满」などの場合、使用例は確認できるが、安定した語形として辞書に採録されないことがある。中国語のAA型疊語が一語として認められる場合とそうでない場合の違いは何か、ということについてもさらに検討すべきである。今後の課題としては、中日の様相類疊語の同じ語形が、日本語と中国語に確認されたものに関して、その意味と用法のずれに注目したい。さらに、疊語の文体的な特徴についても対照研究を行いたい。

参考文献

- 熊谷忠三郎1973『疊語の研究』創文社
国立国語研究所1985『語彙の研究と教育(下)』
鈴木泰1982「タリ活用形容動詞の通時的変化傾向とその要因」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4
玉村文郎1992「日本語と中国語における音象徴語」『日本語と中国語の対照研究論文集』大
河内康憲編 くろしお出版
蜂矢真郷1998『国語重複語の語構成論的研究』塙書房
景 慧1989「中国語の重ね型語について―日中言語比較の一視点―」『宇都宮大学教養部研
究報告第一部』
周 荐2002 現代汉语疊字詞研究 第四届汉语词汇学研讨会发表資料
朱德熙1982『语法讲义』 商务印书馆

参考資料

- 『「分類語彙表」形式による語彙分類表(増補版)』国立国語研究所 1996
『日本国語大辞典』(第二版) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 小

学館 2000-2002

- 『国語学研究辞典』佐藤喜代治編 明治書院 1977
- 『大漢和辞典』（修訂第二版）諸橋徹次著 大修館書店 1989
- 『新選国語辞典』（第八版）金田一京助ほか編 小学館 2002
- 『角川新字源』小川環樹ほか編 角川書店 1992
- 《汉语大词典》汉语大辞典编辑委员会 汉语大辞典出版社 1994
- 《现代汉语辞典》中国社会科学院语言研究所编 商务印书馆 1996
- 《现代汉语重叠形容词词用法例释》王国璋他编 商务印书馆 1996
- 《人民日报2000年电子版》金报电子出版中心出版
- 《人民日报》人民网检索1995年-2000年 人民日报社

(そん き)